

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（一一）

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇

はじめに

縄文土器の型式がなぜ成立するか、また型式の変化がなぜ惹き起こされるのかは、長年にわたる縄文考古学でも謎とされ、研究の進んだ現代においてすら十分に説明されていない。土器に関する考古学的事実は山のように集積されるが、型式の成立と変化過程に関する肝心の原因と社会背景については全く不明という他ない状況である。筆者らは、この課題に取り組み、ここ数年間をパプアニューギニアにおいて、民族考古学的手法による解明を目指して調査を進めてきた。その過程で、同質の型式内容が保持され伝承されるメカニズム、またその土器が広く行き渡り型式が

一定の地理的な分布範囲を形成することについて、当該地域の親族構造や出自体系、婚姻形態が大きく影響している点を確認してきた。特に母系制社会であるイーストケープ地方における出自、クランとサブクラン、それらの分岐の仕方などが製作者の地理的分布を決定する重要な因子である一方で、クランごとに保有されるトーテム等の在り方が婚姻と連動し、関与するクラン間のコミュニケーションの程度やあり方を考える上で重要であることも確認してきた（高橋二〇〇九、二〇一〇、二〇一一）。

一方、型式の内容を決定する在地的な自律的因子とともに他地域からもたらされる他型式の影響関係は重要な要因になることも判明している。イーストケープでは、数十キロメートル離れた外海に浮かぶワリ島から多くの素焼土器

(ワリ式土器) が搬入され、儀礼時の器として、とくにトレハ等の祭儀において使用されてきた。もたらされた土器は地元のイーストケープ伝統の土器製作者にも大きな影響を与え、文様などが模倣され在地の土器の中に取り込まれている。異系統の要素が在地伝統の中に組み込まれることにより、土器型式が変容していく姿を認めることができるのである。

上記二点の視座は、土器型式の在り方を分析する上で重要な項目である。それを念頭に置きながら、今まで約10年にわたる調査で、ケヘララとトパの両地域において、サブクランの配置、全世帯の家屋配置について綿密な地理的地図とを製作することができた。しかし、トパ地区において、バクマニ村だけは諸般の事情により調査が遅れていた。今回の調査はトパ地区バクマニ村におけるクラン、サブクランの在り方とトーテムなどの親族構造、また土器について情報を収集した。結果として、イーストケープの土器型式におけるバクマニクランの果たす役割を知る手がかりを得ることができた。またワリ島に渡海して、イーストケープに土器を輸出する大元の土器製作について調査した。ワリ式独特の器種構成があること、製作者の判明する土器が多数現存すること、また過去にイーストケープに影響を与えた土器製作者の履歴などを知ることができた。

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(一一)

これらの成果は、イーストケープ伝統の土器型式の成立と地理的分布について考察する上で大変重要なデータとなる。
(高橋龍二郎)

1. 二〇一三調査の概要

二〇一三年度調査は、八月三日から九月一五日にかけてパプアニューギニアのミルンベイ州ワリ島 (Wari Island, Milne Bay Province) およびトパミッシェン (Topa Mission) (以下「トパ」と略記する) を対象地として、調査期間前半の九月七日まではワリ島にて、後半の九月八日以降はトパにて調査を実施した(表1)。

本地域は、ニューギニア島東部と周辺の島嶼部を含むマッシム (Massim) と呼ばれる地域に位置する(図1)。筆者らは、二〇〇五年のヤバム島における調査を皮切りに、ミルンベイ州に所在する土器生産地で土器製作の民族誌を調査しており(高橋ほか二〇〇七)、とくにニューギニア島東端部に位置するイーストケープにおいて二〇〇六年から継続的な調査を実施している。今次調査は、トパ北部東部における悉皆的な情報収集を目的として実施した。トパにおいては、すでに二〇〇六年、二〇〇七年、二〇〇八年、二〇一〇年と四度にわたる調査から各種のデータを蓄

積している。ただし北東部については諸々の事情により十分な調査を行うことができておらず、いずれも断片的なデータとなっていた。そこで今次調査は、トパにおける補填的調査として、主に北東部の集落配置と社会組織、そして土器および製作者に関するデータ等を収集した。

ワリ島は、イーストケープの南に位置し、ミルンベイ州の州都アロタウ (Alotau) からモーターボートで約四時間の距離にある(図2)。ワリ島はマッシム南部における大規模な土器生産地のひとつであり、ワリ島産の土器はマッシム北部にも及び広範に流通している。イーストケープにおいても、在地の土器とならぶほど多くの小型・大型のワリ島産の土器が搬入されている。筆者らは、ワリ島における土器の生産・流通体制を探る目的のもと、すでに二〇〇九年に現地調査を実施してお

表1 2013年度調査行程

日付	行程・調査内容	調査地
8月31日(土)	【空路】成田空港⇒ジャクソン国際空港(ポートモレスビー)	-
9月 1日(日)	【空路】ジャクソン国際空港⇒ガーニー空港(アロタウ)	-
9月 2日(月)	ミルンベイ州政府のオフィスにて調査許可証の申請・発行、および昨年度調査報告書の提出 アロタウマーケットにて食料、生活雑貨等の購入	-
9月 3日(火)	【海路】アロタウ⇒ワイディミリ村(ワリ島)	ワイディミリ村
9月 4日(水)	ワリ島内の粘土採掘坑や埋葬地の踏査	ワリ島
9月 5日(木)	土器データの収集、土器製作者への聞き取り調査 親族組織に関する聞き取り調査	トゥアメ村、カプワカプワ村 ロギウィ村
9月 6日(金)	土器データの収集、土器製作の実見 土器製作者への聞き取り調査 親族組織に関する聞き取り調査	ワイディミリ村
9月 7日(土)	【海路】ワイディミリ村⇒アロタウ 【陸路】アロタウ⇒ダワタイ村(トパミッション)	-
9月 8日(日)	データ整理	ダワタイ村
9月 9日(月)	GPS・レーザー距離測定器を用いた簡易測量	ハガハガ村、デラマ村 バグマニ村、ケラケラ村 ムワムワヤ村、ニマフフナ村
9月10日(火)	土器データの収集、土器製作者への聞き取り調査 親族組織に関する聞き取り調査	バグマニ村、サマライ村
9月11日(水)	土器データの収集、土器製作者への聞き取り調査 親族組織に関する聞き取り調査	ムワムワヤ村、ダワタイ村
9月12日(木)	土器データの収集、土器製作者への聞き取り調査 親族組織に関する聞き取り調査	ギダギダ村、ムワムワヤ村
9月13日(金)	【陸路】ダワタイ村⇒アロタウ ミルンベイ州政府へ調査終了の報告 【空路】アロタウ⇒ポートモレスビー	-
9月14日(土)	※機体の整備不良により、日本への国際線が延期	-
9月15日(日)	【空路】ジャクソン国際空港⇒成田空港	-

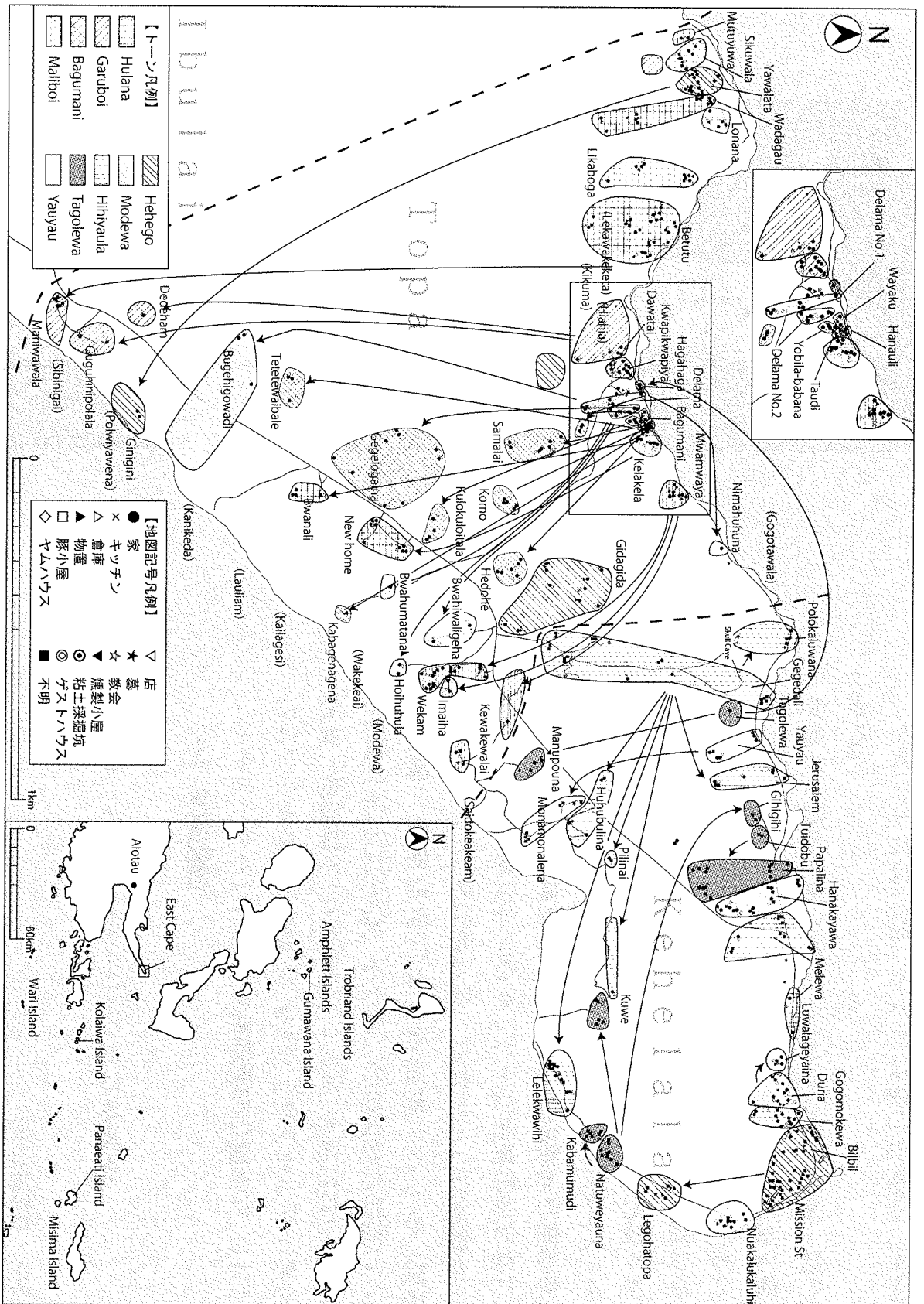


図 1 調査対象地の位置

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査 (一一)

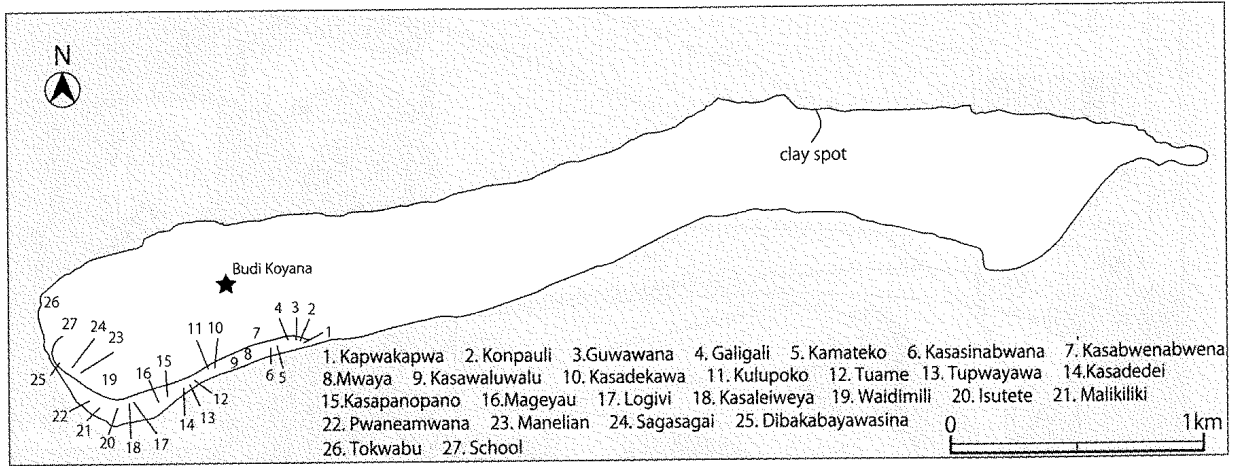


図2 ワリ島

り（高橋ほか二〇一一）、今次調査は二度目の調査となる。

（平原信崇・中門亮太）

2. イーストケープにおける調査

（1）集落配置

イーストケープにおける集落配置の調査は、二〇〇六年にはケヘララミッション（以下「ケヘララ」と略記する）全域（高橋ほか二〇〇八）、二〇〇七年にはトパ北海岸部（高橋ほか二〇〇九）、そして二〇〇八年には同じくトパの内陸部と南海岸部において実施している（高橋ほか二〇一〇）。今次調査では、これまでの追補調査として、十分な調査を実施できなかったトパ北東部を対象に、GPSとレーザー距離測定器を用いた構造物等の簡易測量を実施した。これにより両ミッションにおけるすべての集落、および集落を構成する構造物等を地図上に記録できたことになる（図1）。以下に、今次調査の成果を述べたうえでイーストケープにおける集落配置の概略をまとめておきたい。なお両ミッションは集落の立地や集落内部の構成等に共通する部分が多いため、ここでは両地域を一括して概括する。

ケヘララには二四、トパには四〇の集落 (hamlet) が

存在する。今次調査で新たに確認した集落は、トパ
北海岸部のハガハガ村 (Hagahaga) とニマフフナ村
(Nimahuhuna)、内陸部のギダギダ村 (Gidagida) の三村
である。加えて、これまで一つの集落と認識していたデラ
マ村 (Delama) には、系譜が異なるデラマ1村 (Delama
No.1) とデラマ2村 (Delama No.2) が存在することが
明らかとなった。またバグマニ村 (Bagumani) では、ワ
ヤク (Wayaku)、ハナウリ (Hanauri)、ヨビラ・ババナ
(Yobia-babana)、タウディ (Taudi) という四つのサブ
クランの存在自体は確認していたが、それらが「ワヤク
(wayaku)」と呼ばれる石、「ヨビラ (yobia)」と「チェス
ナツツ」の樹木、という三つの目印に基づいて各領域を明
確に認識して居住していることが明らかとなった。

集落の多くは、北海岸部・東海岸部沿いの起伏が少ない
平坦面に立地しており、「バラバラーナ (balabalana)」と
いう土地の認識に基づき、海岸部から内陸部にかけて展開
している (高橋ほか二〇〇八)。この点は今次調査におい
ても追認することができる。バグマニ村やデラマ村等、複
数のサブクランを包括する母村と認識されている集落は北
海岸部に位置し、それらの分村は南海岸部や内陸部に位置
する傾向がある。つまり、クランとサブクランについては
後述するが、サブクランのさらなる分節に伴いバラバラー

ナにもとづいて北海岸部の母村から南海岸部や内陸部へと
分村していった過程を読み取ることができる。南海岸部は
内陸部から丘陵が続き断崖となっているため、集落は内陸
寄りに立地している。かつては複数の集落が営まれていた
と聞かすが、現在では一、二軒の漁撈用の掘っ建て小屋を確
認できるのみの場所が多い。内陸部は丘陵地であり、主に
耕作地として利用されているため集落はほとんど存在せ
ず、あったとしても小規模である。ただし、南海岸部で生
活していた居住者たちが内陸部に、新たにニューハウス
(New House) 等の集落を形成するという動きがみられる
ことが指摘される。

集落の基本的な構成要素は、高床式住居、炉を有する
台所、「ヤムハウス」と呼ばれる高床式倉庫、物置、仕事
場等である。住居から様々な機能を分離する傾向が強い
が、台所を組み込んだ住居も存在する。トパでは世帯ごと
に台所やヤムハウス、物置を有するのに対し、ケヘララで
は各集落にそれらが一、二軒ずつしかなく、集落の居住者
の共同利用施設として機能している。また内陸部の小規
模集落では、各施設が一セットとしてある。一つの集落
の世帯数は、三〜五世帯が多いが、十世帯を超える比較
的大規模な集落も随所に点在している。集落の規模と母
村・分村の関係は必ずしも比例するわけではなく、概して

母村の方が大規模な傾向は認められるが、ゲゲルゴイナ村 (Gegelugoina) やウエカム村 (Wekam) など母村より規模が大きい分村も存在する。

今後はこれまで記録したデータをもとに、単一集落内における占地や居住領域の認識、その区分原則等、よりミクロな視点にたった分析から集団内および集団間の関係性を検討する必要がある。

(2) 社会組織に関する調査

① クランとトーテム

イーストケープでは、母方の出自にもとづき、メジャー クラン (major clan) (以下「クラン」と略記する) とサブ クラン (sub clan) という親族集団が形成されている (表 2)。クランは、明確に系譜をたどることはできないが成員同士が互いに共通の帰属意識を有する親族集団であり、鳥・蛇・魚・植物の四種のトーテムによって自他を区別している。サブクランは、成員同士が明確に系譜をたどることのできる点でリネージに近い親族集団である。クランはイーストケープのみならず、周辺の島嶼部にも広く展開している。クランはサブクランに分節され、サブクランの名称と集落名称との対応関係が示す通り、サブクランは集落を構成する主要素であり、これに他のクランから婚入

した配偶者が加わって集落が構成されている。ただし、トパのシクワラ村 (Sikuwara) やムウムワヤ村 (Mwamwaya) のように、単一の集落に複数のクランが共住している場合もあるため注意される (高橋ほか二〇一二)。

今次調査では、新たにマリボイクラン (Maliboi) を確認し、これによりトパには八つ、ケヘララと合わせると九つのクランを確認するに至った。二〇〇七年度の調査報告で同名のクランを記載しているが (高橋ほか二〇〇九)、これはガルボイクラン (Garuboi) の誤りである。両クランは蛇トーテムをガルボイとする点で共通するが、当地域で最も重要視される鳥トーテムが異なる。また二〇〇七年以後の調査によってもダワタイ村 (Dawatari) はガルボイクランの成員による集落であることを確認しているため、ここであらためて訂正しておきたい。マリボイクランは、マリボイを鳥トーテムとし、ガルボイを蛇トーテムとする。魚・植物トーテムについては確認できなかった。マリボイクランのサブクランは、トパのムウムワヤ、ケワケワライ (Kewakewalai)、ウエカム、イマイハ (Imaiha) であり、パヒレレ島 (Pahilele Island) にもサブクランが存在する。

またバグマニ村やサマライ村での聞き取り調査から、バグマニクランおよびそのサブクランの関係が明らかになっ

表2 クランとトーテムの対応関係

major clan	big family	sub clan		bird	totem							
		hamlet	bird		snake	fish	plant					
Modewa	Delama 1	Bugehigowadi	Delama 1	kulokulo	tuinana	keboia	hiyaga					
		Nimahuhuna										
	Delama 2	Bwahiwaiigeha										
		Bwahurnatana										
	Delama 2 (Modewa)	Hoiuhula										
		(Kanikedada)										
	Pahilele Is.	Nuakalukaluki		keroro								
		Hanakayawa										
	Duria											
	Luwalageyama											
Hulana	Madagau	Mutyuwa		magisulbu	keukeula	bahbahi	puto					
		Likaboga										
	Kelakela	New home										
		Bwarali (Wakekeal)										
	Part of Sikuwala?											
	Betutu											ohiyo
Yauyau	Yauyau	Monamonalena		magisulbu	(+) (+)	baewa	madawe					
		Lonana										
	Gogomokewa											
	Melewa											
Hihiyaula	Gegedali	Polokaluwana		takowa	hanauli	wali	yobila					
		Huhubulina										
	Jerusalem											
	Lelekawihhi											
Pihina												

major clan	big family	sub clan		bird	totem		
		hamlet	bird		snake	fish	plant
Tagolewa	Tagolewa	Manupoura		binama	dewa	(+) (+)	youngwana
		Hagahaga					
	Natuwayauna	Kabamunudi					
		Kuwe					
Tuidobu	Tuidobu	Gihighi		waiwai	garuboi	igornida	(+) (+)
		Papalina					
		Dawatani					
Garuboi	Dawatani	Guguhinipolala		garuboi	igornida	(+) (+)	
		Kwapikwapiya					
	Part of Sikuwala?						
	Mwanwaya						
Maliboi	Mwanwaya	Kewakewalai		maliboi	garuboi	x	x
		Wekam					
	Imaiha	Part of Pahilele Is.					
		(Saidokeakeam)					
Hehego	Yawalata	Ginigini		gabubu	hanauli	tuhijili	yobila
		(Poliwiyawena)					
	labam Is.	Part of labam Is.					
		Mwanwaya (Gidagida)					
Bagumani	Bilbil	Legohatopa		kehoi	hanauli	tuhijili	yobila
		Hanauli					
	Hanauli	Samalai					
		Komo					
	Hedoh						
	Kabagenagena						
Taudi	Taudi	Tetetewabale		kehoi	hanauli	tuhijili	yobila
		Wayaku					
	Gegeugoina						
	Yobila-babana						
Part of labam Is.							

た。すなわち、トーテムの共通性からこれまでバグマニ克蘭はあくまでヘゴ克蘭の一部であると認識していたが、バグマニ克蘭は分節された複数のサブ克蘭を包括する独立した克蘭であると認識を改めるに至った。バグマニ克蘭には、ハナウリ、タウデイ、ワヤク、ヨビラ・ババナの四つのサブ克蘭があり、それらが居住域を区画してバグマニ村で居を構えていることは前述の通りである。

② 集落の分岐について

二〇一二年度にケハララで実施した調査によって、複数のサブ克蘭を包括する「オリジナルファミリー (original family)」の存在が明らかになった (高橋ほか二〇一四)。「オリジナルファミリー」という呼称はインフォーマントが使用していた呼称であり、それにならって筆者らもそう呼称している。「オリジナルファミリー」という言葉は、同一克蘭に属すサブ克蘭のうち、特に起源を同じくするサブ克蘭に限って使用される。つまりオリジナルファミリーは同一克蘭内におけるサブ克蘭間の系統差を示していると考えることができる。これは、克蘭内の通婚が許容される傾向にあっても、オリジナルファミリーおよびサブ克蘭内の通婚は固く禁じられていることからもうかがえよう。今次調査によってトパにおいても集落間関係

とともにそれらの系統関係が整理され、オリジナルファミリーの存在を確認した。以下に克蘭ごとに報告する。

モデワ克蘭 (Modewa) では、ブゲヒゴワデイ (Bugehigowadi) とニマフフナ (Nimahuhuna) は、デラマ No. 1 を起源とするオリジナルファミリーである。またブッヒワリゲハ (Bwahiwaligeha) とブワフマタナ (Bwahumatana)、ホイフフナ (Hohuhuna) の三村はデラマ No. 2 を起源とするオリジナルファミリーである。フナナ克蘭 (Hulana) では、ニューホームとブワナリ (Bwanali) はともにケラケラ (Kelakela) を起源とするオリジナルファミリーである。ヘゴ克蘭 (Hehego) では、ギニギニ (Ginigini) はヤワラタ (Yawalata) を起源とするオリジナルファミリーである。バグマニ克蘭 (Bagumani) では、ハナウリ、タウデイ、ワヤク、ヨビラ・ババナの四つのサブ克蘭がそれぞれオリジナルファミリーを形成している。ハナウリにはサマライ、コモ (Kono)、ヘドヘ (Hedohé)、カバゲナゲナ (Kabagenagena) が含まれ、タウデイにはテテワイバレ (Tetetewaibale) が含まれる。またワヤクにはゲルゴイナが含まれ、ヨビラ・ババナはクロクロイタラ (Kulokulotala) を含み、ヤバム島 (Tabam Island) にも移住している人々がいる。これらオリジナルファミリーを

形成するサブクランは、それぞれ四人の姉妹に起因することが今日に伝えられている。

ガルボイクラン (Garuboi) には五つのサブクランがあるが、ググヒニポララ (Guguhinipolala) とクワピクワピヤ (Kwapikwapiya)・デデハム (Dedeham) はダワタイのオリジナルファミリーである。そのうちググヒニポララ村は、半世紀ほど前にダワタイ村出身でガルボイクランに属す男性がテレゲレタナ (*telegetana*) の制度によってランドオーナーに居住を認められて形成された集落である (高橋ほか二〇〇九)。この男性の子孫は、もともとは母方のヘヘゴクランに属していたが、テレゲレタナによって土地を所有するガルボイクランへ変更されている。またクワピクワピヤ村には、ナトゥレヤ (*natuleya*) という制度によって、バグマニクランの成員が居住している (高橋ほか二〇一〇)。ナトゥレヤはクランの変更を伴わないため、クワピクワピヤはガルボイクランのオリジナルファミリーとはいえず、親族集団が異なることが指摘される。つまりオリジナルファミリーといっても、同一の親族集団で構成される場合と厳密には親族関係にない人々、言わば制度上の親族関係を含む場合があり注意が必要である。今後は、個々のサブクランの形成過程と土地利用の歴史をさらに追究することが課題となろう。

(3) 土器に関する調査

ここでは紙幅の都合上、二〇一三年度に訪れた各集落における土器の所有状況を示し、調査域の保有傾向を従前の調査と比較することで報告としたい。収集対象とした土器は完形もしくは略完形の土器である。従前の調査と同様に所有者の許諾を得て、写真撮影、法量計測、実測、拓本によって物的情報を記録し、かつ製作者ないし所有者に聞き取りを行って土器に付随する情報を収集した。

今次調査では、ワヤク、ヨビラ・ババナ、ハナウリ、タウデイ、サマライ、ムウムワヤ、ギダギダの七つの集落において計一九点の土器データを収集した (表3)。器種による内訳は、在地系では日常調理・儀礼食調理用のギルマ (*giluma*) が最も多く八点、次いでモナ (*mona*) という水団状の調理に限定的に使用するハバヤ (*habaya*) が四点である。かつて埋葬に供されたピドドラ (*pidola*) と水甕や日常調理にも使用するグマシラ (*gunasila*) は一点も収集されず、子供用の土器とされるヌ・キケイ (*nu-kihei*) が一点収集された。その他の土器では、ギダギダ村にて小型のワリ島産の鉢形土器グレワ (*gulewa*) が一点収集された。在地系のピドドラとグマシラの所有数が極めて少ないことは、イーストケープ一帯に通有する。また在地系のギルマとハバヤを多く保有し、グレワを含めた搬入土器の割

表3 2013年度調査地における土器の保有状況

	<i>giluma</i>	<i>habaya</i>	<i>pidola</i>	<i>gumasila</i>	<i>nu-kikei</i>	その他器形	計
Wayaku	0	1	0	0	0	1(<i>wogo-habahabaya</i> か)	2
Yobila-babana	1	0	0	0	0	0	1
Hanauli	1	1	0	0	0	0	2
Taudi	0	1	0	0	0	0	1
Mwamwaya	5	0	0	0	0	2(不明)	7
Samalai	0	1	0	0	0	0	1
Gidagida	1	0	0	0	1	1(<i>wari</i>), 2(不明)	5
計	8	4	0	0	1	6	19

合が少ないという点では、在地系土器と同程度の搬入土器（とくにワリ島産の土器）を保有するケヘララとは異なり、トパに通有する一般的傾向を示している。今次調査域は行政区分ではトパに属すが、地理的にはちょうど両ミツシヨンの中間地帯に位置している。今次調査によって、両ミツシヨンにおける土器の保有傾向が対照的であることがより鮮明になったといえよう。
（平原信崇）

3. ワリ島における調査

(1) ワリ島の概要

ワリ島は、ミルンベイ州南部に位置する東西約4km、南北約1kmの小島である（図2）。エンジニアリング諸島（*Engineer group*）を構成する島の一つで、行政的な区分としてはヴァナヴァナ地域政府（*Bwanabwana LAG*）の管轄下にある。言語は、スアウ（*Suau*）諸語に属するヴァナヴァナ語が話されているが、ミルンベイ州の中でも敬虔なキリスト教徒が多く、島民の多くは英語を話す。

ワリ島は、古くはテスト（*Teste*）島とも呼ばれ、土器づくりが見られる地域であることが記録されている（*Haddon 1894*）。土器の流通範囲は、デントロカスト諸島（*D'Entrecasteaux Islands*）から、ウッドラーク諸島

(Woodlark Islands) まで広がるとされ、本地域における交易の中心地であったことが指摘されている (Haddon 1894)。後の調査でもワリ島がマッサム南部における土器の中心地として記録されており (Belslaw 1955)、またクラ交易網とマイル交易網の接点に位置する交易の要所としても認識されている (Irwin 1985)。

生業は、焼畑と漁労が中心であるが、土地がやせているため、他地域との交易によって食料など様々なものを入手している。ワリ島からの輸出品は専ら土器であり、「No clay pot, no food」と言われるほど、土器は交易品として重要な地位を占めている。

ワリ島では、日程の都合から、土器づくりを中心に調査を行った。筆者らは、二〇〇九年度にワリ島において予備的な調査を行っており、集落配置や社会組織に関する詳細は、既報告 (高橋ほか二〇一一) を参照されたい。

(2) ワリ島の土器づくり

ワリ島における土器づくりは、古くは十九世紀後半の民族誌による記録に見られ、女性が土器を作る点、櫛歯状工具によって文様を描く点などが記録されている (Haddon 1894)。根岸洋氏がカサシナヴァナ (Kasasinabwana) 村で行った発掘調査では、ラピタ土器以前にオセアニアに分

布した赤色スリップ土器よりさらに古い層から、無文の土器が出土しており (Negishi 2009)、ミルンベイで最古段階の土器伝統が見られる。しかし、型式学的な検討から、現在のような丸底で櫛歯状工具による文様を持つ鉢形土器の伝統は、古くとも十五世紀以降のものと考えられる (Negishi 2008)。筆者らは、二〇〇九年度調査でワリ島の土器づくりを一度記録し報告しているが (高橋ほか二〇一一)、ここでは、今次調査で筆者らが実見したT氏の土器づくりを取り上げ、改めてワリ島における土器づくりを紹介する。

【器種と器形】

ワリ島における土器は、煮炊き調理に用いる鉢形のグレワ (*gulewa*)、マイムア (*mainua*)、フライパンの様にしている浅鉢形のカワエガ (*kawaega*)、フラワーポットの四器種がある (図3)。マイムアは、今次調査ではじめて記録した器種であり、粘土紐の輪積み痕を明瞭に残すもので、櫛歯状工具による文様は描かれない。イーストケープにおいて、輪積み痕を残す器種であるピドラは埋葬用の土器であるが、マイムアは調理用の土器であり、あまり関連はないのかもしれない。マイムアは伝統的な器種であるとのことであったが、ワリ島で一点、アロタウのマーケツ

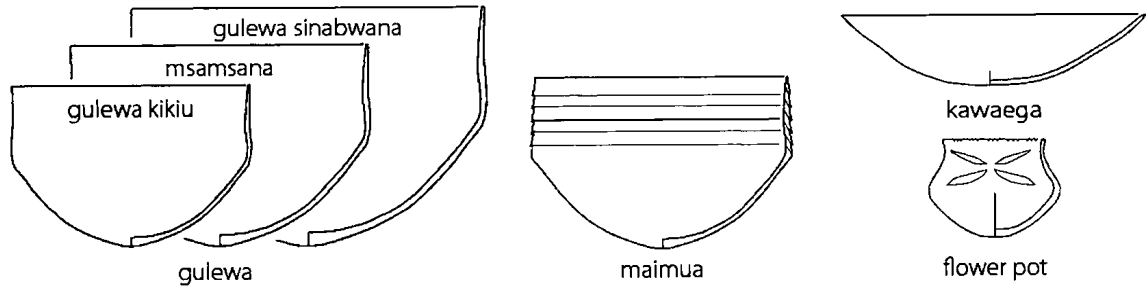


図3 ワリ島の土器

トに売りに出されていた一点の計二点しか見られなかった。筆者らがこれまでイーストケープにおいて収集してきた土器にも見られず、近年ではあまり作られていないのかもしれない。

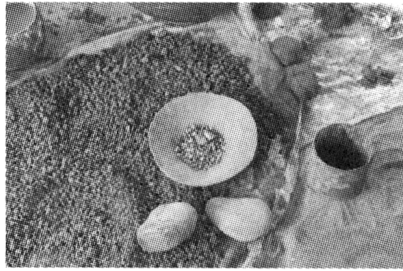
【土器製作…下準備】

ワリ島の粘土採掘坑は一カ所であり、島民であれば誰でも自由にアクセスできる。集落からはやや離れた場所に在るため、いつでも土器づくりを行えるよう大量に採取してきて保管しておく。採取してきた粘土は、天日にさらされ、磨石と石皿を用いて細かく砕き(図4-1)、砂礫やゴミなどの不純物を取り除く。その後、水を加えて粘土をこねて均質な素地を作る

(図4-2)。これらの素地づくりは、少なくとも土器づくりの前日までには行われるようである。

【土器製作…成形】

ワリ島の土器づくりは、粘土紐の巻き上げ・輪積みによって行われる。調整した素地から拳大の粘土塊をいくつか用意しておき、それを両手で揉み捻ることで粘土紐を作出す(図4-3)。粘土紐を巻き上げて底部を作出したら(図4-4)、成形用の皿の上に置き、引き続き粘土紐の作出・巻き上げを行っていく。底部から胴部の成形は、放射状に広がっていき(図4-5)、粘土紐一本がちょうど一周するあたりで巻き上げから輪積みへと変わるようであり、その後は粘土紐を継ぎ足しつつ一段一段輪積みによって成形を行っていく。この段階での巻き上げ・輪積みは、左手で粘土紐を持ち、右手の親指で粘土紐を押しつぶしながら、反時計回りに行われる。右手親指は、器壁内面にくるため、接合は内傾接合となる。ある程度粘土紐を積み上げたら、適宜内面に縦方向のユビナデを施し(図4-6)、輪積み痕を消す。屈曲部に当たる部分に到達すると、右手で粘土紐を持ち、左手の親指で粘土紐を縦に引き延ばすようにしながら輪積みが行われる(図4-7)。粘土紐は垂直方向に捻り潰されるため、屈曲部が形成される。輪



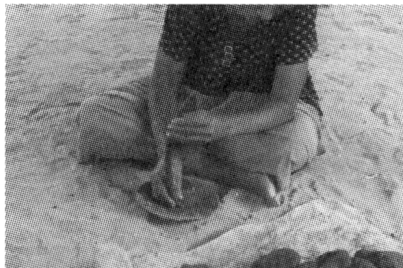
1. 素地の調整①



2. 素地の調整②



3. 粘土紐の作出



4. 底部の作出



5. 巻き上げによる形成



6. ユビナデによる調整



7. 輪積みによる屈曲部の作出



8. 輪積みによる成形



9. ユビナデによる調整



10. 貝殻によるケズリ



11. ユビナデによる調整



12. 貝殻による調整



13. 貝殻による口唇の平滑化



14. 手の平による調整



15. 施文

図4 ワリ島の製作工程

積みは、底部成形と同じく反時計回りに行われるが、左手親指は器壁外面にくるため、外傾接合となる。この外傾接合の輪積みを二段行った所で、一度成形を中断し乾燥を行う。乾燥により、ある程度土器が固くなったら、再び外傾接合による輪積みによって口縁部を垂直に立ち上げていく(図4-8)。大型の土器の場合は、底部から胴部の成形時や、口縁部の立ち上げの際など、数度の乾燥を挟む場合があるという。口縁部の成形が終わると、再び乾燥を行う。

【土器製作・整形・施文】

成形が終了し、乾燥がある程度進んだら、まずユビナデによって内外面の輪積み痕を消していく(図4-9)。ユビナデは、まず縦方向に施され、その後横方向に施される。ユビナデが終わると、貝殻によるケズリを施す(図4-10)。ケズリもまた内外面双方から行われる。このケズリを徹底的に施すことで、ワリ島の土器の最大の特徴である薄い器壁が生み出される。⁽¹⁾ケズリ調整が終わると、ユビナデ(図4-11) および貝殻の背で器面を磨き上げ(図4-12)、口唇を平滑にし(図4-13)、水をたっぷりつけて手のひら全体でナデを施す(図4-14)。

施文はこのナデ調整の水が乾く前に行われる(図4-15)。施文具はクロヤシの木を削って作った櫛歯状の工

具で、筆者らが実見した製作者は二本歯、三本歯、四本歯の三種類を所有していた。ワリ島の土器は、通常口唇部と屈曲部に波状の沈線がめぐり、その沈線間に幾何学的な文様が描かれる。施文はまずこの上下の波状沈線をめぐらせ、その後主文様を描いていく。最後に、施文具の反対側で屈曲部に刺突をめぐらせて完成である。

なお、今次調査では実見できなかったが、この後再び乾燥を行い、ある程度経ったら土器を逆位に設置して底部外面の器面調整を行う(May & Tuckson 1982)。焼成は、風通しの良い場所で、一つずつ焼くとのことであった。

(3) 土器の文様に関する聞き取り

今次調査では、ワリ島の土器に描かれる文様について、聞き取りを行った。聞き取りによると、ワリ島の土器に描かれる文様のうちいくつかは、伝統的な文様として認識されており、文様にはそれぞれ名前が付けられている(図5)。筆者らが今次調査で確認できた文様の名前は九つであり、伝統的な文様ではあるが名前はわからないというものもあった。

本地域に於ける土器の文様については、マキンタイアがトゥベトゥベ島における調査の中でまとめている(Macynaire 1982)。トゥベトゥベ島の土器の文様は、三

角形や菱形を基調とした「クリコト (Kuli koto)」、垂線により文様を描く「クリケスリ (Kuli kesuli)」、長方形を基調とし入組んだ文様を描く「クリダバトム (Kuli dabatom)」、曲線や波線によって文様を描く「タナタナララシ (Tanatana Jalasi)」の四種類が基本形としてあり、個々の文様にも固有の名前があるという。特に、「クリダバトム」については、「特に大型の土器に施されるもの」と記録しているが、それ以外の文様は器形や大きさとの関係はない。また、「タナタナララシ」については、マッシム地域の芸術に広く見られる文様と指摘している。筆者らは、器種と文様の関係については聞き取りを行うことができなかつたが、矩形の囲いを施す土器が、それ以外の土器と比べ大型であることは、収集したデータから読み取ることができるとは、中門二〇二二。また、ワリ島は一つのコミュニティという意識が強いようであり、クランなど、特定の集団と結びつきのある文様は見出せなかつた。

筆者らの記録とマキンタイアの記録を比べると、「クリケスリ」、「クリダバトム」は概ね似通っている。「クリコト」は「クリクト」と対応するものであろう。しかし、筆者らが記録した「タナタナララシ」は、山形の文様を重ねたものであり、マキンタイアの記録とは大きな隔たりがある。土器の文様については、多くの文様があり、それらが

製作者間でコピーされたりして、名前が忘れられたものが多いという。一度失われてしまった情報を復元することは非常に困難であるが、少なくともエンジニアリング諸島において、土器の文様が単なる装飾としての意味だけではなく、それぞれ固有の名前を持って明確に意識されていたということは指摘できる。文様の系統や属性と、その社会背景などについては今後の課題としたい。

(4) ワリ島の土器生産体制

今次調査で、土器づくりを記録する過程で、興味深い状況を確認することができた。それは、一つの土器製作に複数の製作者が関わることがある、というものである。まず、筆者らが土器づくりの実見を行ったT氏が成形を終えた土器に、T氏の母親が整形・施文を行っていた事例、そしてT氏が成形を終えた土器に他の女性⁽²⁾が整形・施文を行った事例である。このような土器づくりのあり方について、まずワリ島の土器づくりが製作途中で乾燥を挟むことが関係することが指摘できる。イーストケープの場合は、成形から施文まで乾燥を挟むことなく行われるため、一つの土器を製作する過程で複数の製作者が関わる状況になり。

ワリ島の土器は、他地域から生活必需品を入手するため



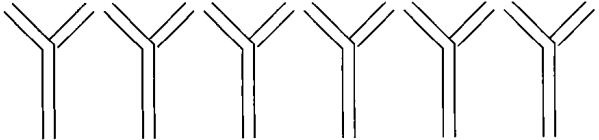
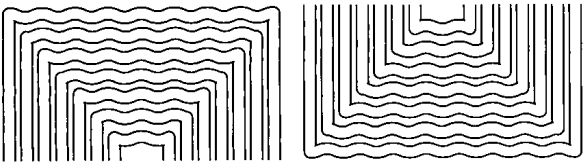
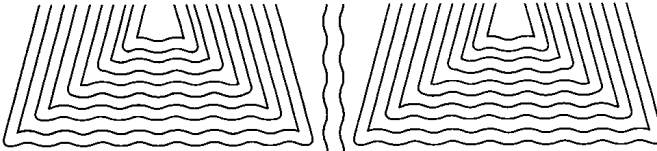
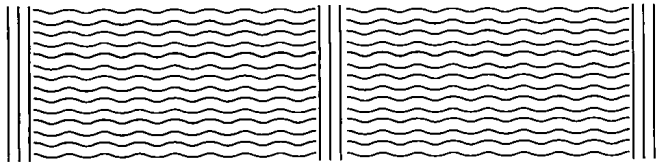
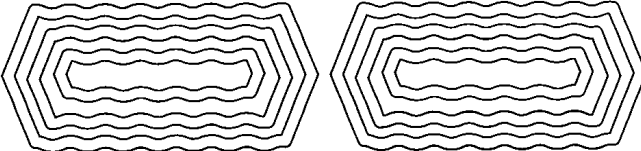
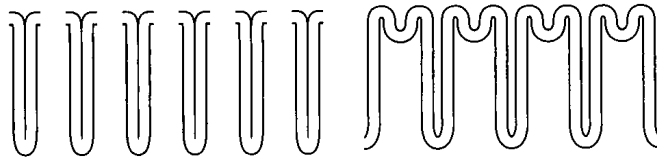
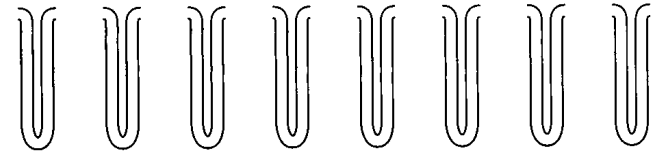
文様	筆者らの記録	マキンタイアの記録
	<p>クリクト (Kuli Kuto)</p>	<p>クリコト (Kuli Koto) 三角形・菱形を基調とした文様</p>
	<p>タナタナララシ (Tanatanalalasi)</p>	
	<p>クリケスリ (Kuli Kesuli)</p>	<p>クリケスリ (Kuli Kesuli) 垂線を基調とした文様</p>
	<p>クリヴァナガン (Kuli Bwanagan)</p>	<p>クリダバトム (Kuli Dabatom) 長方形を基調とした文様</p>
	<p>クリクワロシ (Kuli Kwalosi)</p>	
	<p>クリダバトム (Kuli Dabatom)</p>	<p>クリダバトム? (Kuli Dabatom)</p>
	<p>ヴァイヤトウ (Bwaiyatu)</p>	
	<p>クリバラガイ (Kuli Balagai)</p>	<p>タナタナララシ (Tanatanalalasi) 曲線・波線による文様</p>
	<p>タブレ (Tabule)</p>	

図5 ワリ島の土器文様

の重要な交易品であるため、個人のものというよりコミュニティ共有のものという位置づけが強い。土器づくりには特定のシーズンはなく、畑仕事の合間に行われる。そのため、成形と整形・施文は、製作者の都合によって複数の製作者が関わる可能性がある。

後藤明氏は、インドネシア・マレ島の土器づくり民族誌のなかで、交易と密接に関係する土器製作の技法や生産戦略について記録をしている（後藤二〇〇七）。マレ島における土器製作は、土器の大きさに応じて胎土を球形に丸める工程（工程A）、その土を目指す器形に応じて手で広げる工程（工程B）、器の粗形を作る工程（工程C）という、異なった製作段階を経て様々な器形が作られる。マレ島民は交易に出すための計画に沿って目指す器種を特定しているため、「彼らの製作戦略は〔 $A1+A2+\dots+An$ 〕+〔 $B1+B2+\dots+Bn$ 〕+〔 $C1+C2+\dots+Cn$ 〕とモデル化できる」。マレ島の土器は、「一〇〇個〜二〇〇個をカヌーないしモーターボートに積んで商人に卸す」という、交易のための土器であり、製作スケジュールや販売航海との関係から、大量に同じ器種を作る必要性に迫られる。そのため、「規格性を高めるために同じ作業を繰り返して一種の「リズム」を保つ必要がある」ことから、先述の生産戦略は合理的であると捉えている。マレ島において、「土

器づくりとその交易は村全体の産業」であり、「土器製作は共同体全体に埋め込まれる」のである。

ワリ島の土器づくりにおいて、底部から屈曲部までの成形を工程a、屈曲部から口縁部までの成形を工程b、器面調整から施文までを工程cとすると、今次調査で記録した事例は、工程bと工程cの間で別の製作者が関わった事例である。

ワリ島の土器は、大きさによる呼称の違いがあるが、筆者らが収集したデータを見ると、器高の三〇cm前後と四六cm前後を境に、小型・中型・大型が分かれるようである（図6）。ワリ島の土器製作技術を有する製作者の中でも、大型の土器は難しく作れないというものがいたが（高橋ほか二〇一四）、大型の土器は全体の二割以下で非常に少ない。口径は二四cm前後、三三cm前後、四二cm前後に分布の切れ目が見える。一方、イーストケープにおけるギルマのデータをみると、器高は二二cm前後、口径は三〇cm前後が境となるようである（図7）。ワリ島と比べ、小型から中型に分布の中心があり、口径は全体的に広くばらついている。両者を比べると、ワリ島の土器は、專業化した土器づくりほどではないにせよ、ある程度規格化している様子が窺える。ワリ島の土器が、交易品として重要な位置を占めていることを考えると、このような製作工程、及び土器

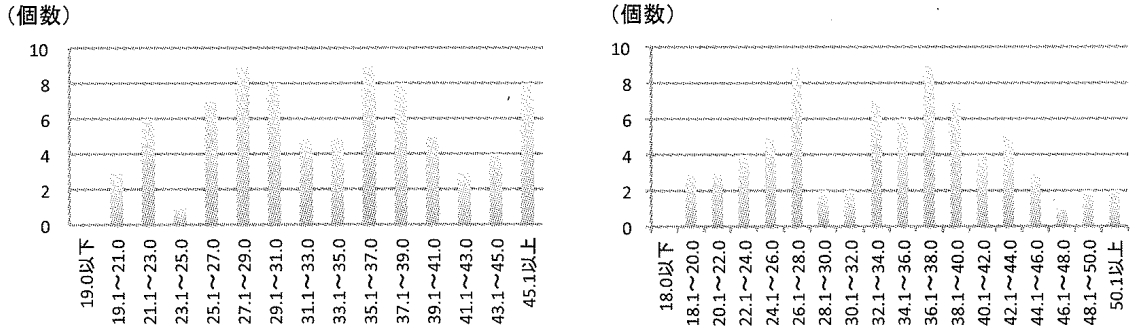


図6 ワリ島の度数分布 (左：口径、右：器高)

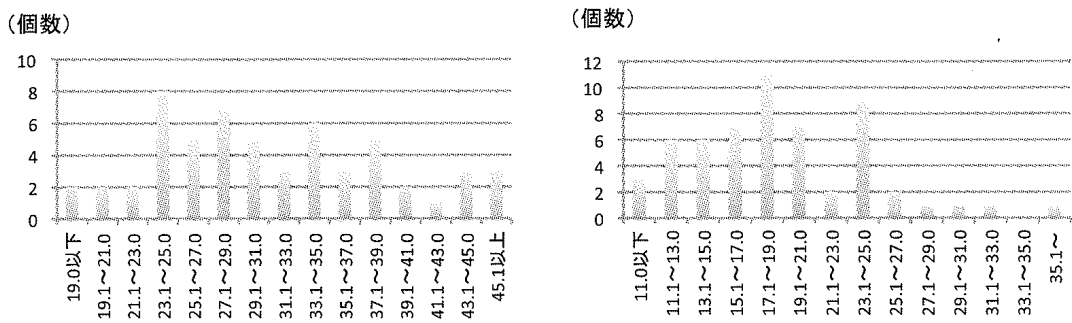


図7 ECの度数分布 (左：口径、右：器高)

の規格度は、自家消費的な土器づくりと、マレ島に見る戦略的な土器づくりとの中間的な様相を示していると考えられる。

また、今次調査では、アロタウのマーケットで土器を売っている状況を確認した。土器の中には、米が焦げ付いているものなども見られた。ワリ島民は、交易用の土器として特別に製作することもあるであろうが、自身の状況に応じて手元にある土器を売りにいくこともあるようである。マキンタイアによると、トウベトウベ島でも、既に使用した土器であっても、更なる使用に耐えうるようであれば交易用の土器として選択することがあるという (MacIntyre 1982)。

今次調査では、本地域の土器型式に多大な影響を与えていると考えられるワリ島の土器づくりについて、多くの知見を得ることができた。ワリ島の土器づくりは、コミュニティ全体の生活と深く関わる重要な資源であり、イーストケープの土器づくりとは製作技法のみならず生産体制など社会的背景が大きく違うことが窺える。ワリ島における調査は未だ限定的なものであるが、製作技法や交易網、生産戦略など、土器型式成立の背景には様々な事象が関係するようである。

(中門亮太)

おわりに

今回の報告では、イーストケープ伝統の土器型式におけるバクマニ村の関与について概略を報告することができた。それは同村の独特なサブクランと分節化の仕方に現れており、トーテムの種類と変異などが村の分岐とも連動して、新たな地域戦略として浮かび上がってきた。また同村の宗教的位置の確認も含めて、土器型式との関わりについて重要な情報を得ることができた。

ワリ島における民族誌的調査は今回で二回目であるが、クラン、サブクランとトーテムの在り方などにおいてワリ島独特の種類と配列を知ることができた。また過去にイーストケープの土器型式に大きな影響を与えたO女史の経歴やイーストケープにおける彼女の子供たちの土器製作・型式上の位置づけを考える上で重要な情報を得ることができた。

もう一つ土器型式の変化を考える上で重要な視座は、なぜ、どのように土器型式が変容するかを突き止めることと関連して、土器型式を変革する主体者が存在するらしいことを感知しえたことである。地域の土器作りのリーダーとして周囲に知れ渡ったD女史の存在である。その事実につ

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(一一)

いては以前に報告した(高橋二〇一一)。今回の調査でその事実関係をさらに追及することができた。彼女が土器作りの第一人者として周辺地域に広く知れ渡り、多くの弟子筋を生み出し、土器を変革することができるのは自分だと豪語できる人物D女史である。彼女の経歴や親族関係を聞き取るうちに、彼女が単なる製作技術に優れた人物であるという以外に、それ以外の点において周囲から高く評価されている面があるらしいことを知覚できた。それについては土器型式の変革とも関係する重要な因子だと考えられるので、これからも継続して調査して行きたい。なお、今回の調査は学術振興会科研費によるものである(高橋龍三郎 基盤(C) 課題番号二三五二〇九三五、中門亮太 若手(B) 課題番号二四七二〇三六〇)。明記して謝意を表したい。(高橋龍三郎)

註

(1) 筆者による簡単な計測では、ケズリの前後で器壁は5mmほど薄くなっていた。

(2) この女性がT氏とどのような関係にあるかは聞き取りしていない。

引用文献

- Haddon, A. C. 1894 *The Decorative Art of British New Guinea: A Study in Papuan Ethnography*. The Academy House
- Irwin, G. 1985 *The Emergence of Mailu*. Terra Australis 10. ANU
- Macintyre, M. 1982 Pottery Manufacture on Tubetube. *Canberra Anthropology*. Vol 5. Issue 2.
- Malinowski, B. 1984 [1922] *Argonauts of Western Pacific*. Waveland Press, Inc.
- May, P. & M. Tuckson 1982 *The Traditional Pottery of Papua New Guinea*. University of Hawaii Press
- Negishi, Y. 2008 Comb and Applique: Typological Studies of Two Ceramic Traditions during the Last Thousand Years in the Eastern Papua New Guinea. *Bulletin of the Department of Archaeology, the University of Tokyo*, No. 22.
- Negishi, Y. & R. Ono 2009 Kasasinabwana Shell Midden: The Prehistoric Ceramic Sequence of Wari Island in the Massim, Eastern Papua New Guinea. *People and Culture in Oceania*, 25
- Seligmann, C.G. 1910 *The Melanesians of British New Guinea*. Cambridge University Press

後藤明 二〇〇七「東部インドネシア・マレ島における土器製作システム―海上・土器製作Ⅱ交易者Ⅲシステムに埋め込まれた土器製作」『土器の民族考古学』同成社

高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸洋 二〇〇七「パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査(三)―ミルンベイ州イースト・ケープ 周辺の調査概報―」『史観』第一五六冊、七四―九四頁

高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸洋・中門亮太 二〇〇八「パプア・ニューギニアにおける民族考古学的調査報告4」『史観』第一五八冊、七四―九九頁

高橋龍三郎・井出浩正・根岸洋・中門亮太・根兵皇平 二〇〇九「パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査(五)―ミルンベイ州トパにおける調査概報―」『史観』第一六〇冊、七二―八九頁

高橋龍三郎・井出浩正・中門亮太 二〇一〇「パプアニューギニアにおける民族考古学調査(六)」『史観』第一六二冊、七九―一〇〇頁

高橋龍三郎・中門亮太 二〇一〇「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(七)」『史観』第一六四冊、一〇四―一〇六頁

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾・服部智至 二〇一〇「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査

二〇一〇「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査

(八) 『史観』 第一六六冊、八三―九九頁

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇 二〇一四 「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(一〇)」 『史観』 第一七〇冊、九八―一二二頁

中門亮太 二〇二二 「イーストケープ地方の土器生産と交易」

『三大学公開シンポジウム パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会 発表要旨集』 早稲田大学考古学研究室